

平成14年度企画展

館 蔵 品 展

平成15年1月18日（土）～平成15年3月16日（日）



出羽国村山郡山寺村立石寺と同村河原御林地境論裁許絵図（延享3年）

開催にあたって

この企画展は、博物館資料の収集・整理、調査研究活動のまとめとして毎年開催しております。

今回は、地学・植物・動物・歴史・民俗・教育の6部門の資料のうち、整理が終了した資料の紹介や話題性のある新収蔵品の紹介など、本館所蔵の未公開資料を中心に展示します。本展をとおして、山形県の自然や文化に対する理解が深まれば幸いです。

本展を開催するにあたり、資料をご寄贈いただいた方々や収集・調査研究活動にご協力いただいた方々に、厚くお礼申し上げます。

山形県立博物館

展 示 解 説

【地学】卵化石のようなコンクリーション

一見、卵化石を思わせるようなコンクリーションの資料です。コンクリーションとは、堆積物が岩石に変わる過程で特定の成分が濃集して形成されるものです。一般にノジュールとも呼ばれます。この標本は、表面部分と内部が明瞭にはがれやすく、あたかも卵化石のような形状を呈するようになっためずらしい例です。

山形県小国町産の植物化石

小国町から産出した植物化石で、ナウマンヤマモモやチュウシンフウの化石などがみられます。これらの植物化石群は、台島型植物群と呼ばれています。温暖系を示す常緑樹と落葉広葉樹の割合が高く、当時は、現在と比べて温暖な気候であったことを物語ります。時代は新第三紀中期中新世初期のおよそ1600万年前頃のものです。



コンクリーション

【植物】山形で近年見つけた帰化植物

外国原産の植物が日本に侵入し、野生状態になっているものを「帰化植物」と言います。



オオカナダモ

帰化植物は種子が外国から輸入される荷物に付着したり、穀物飼料・野菜・綿花・羊毛などに混入したりして国内に運び込まれて発芽したもので、最初は港や工場の周辺に土着し、交通機関や風に運ばれて次第に範囲を広げるのが普通です。山形県でも、鉄道や国道の整備にともなって帰化植物が増えてきています。本展示では、ここ10年で山形で見つかった帰化植物を紹介します。特に注目したいのは、アクアリウムなどで持ち込まれた水草（オオカナダモ、コカナダモ、フサジュンサイ）が帰化種として野外で大繁殖し、本来の生態系を脅かし始めていることです。

【動物】ほ乳類・鳥類はく製標本、蛾類標本

今年度、新たに寄贈されたツキノワグマとアナグマのはく製標本を展示します。

森林開発の影響による餌不足などのためにツキノワグマが人里に下りて来るようになり、果樹を始めとする農作物の被害が毎年のように報告されています。餌不足を反映している

のか、駆除などで捕獲されるツキノワグマも最近では体重100kgを超える個体はめずらしくなりました。今回、寄贈されたツキノワグマは180kgをこえる堂々とした体格で上山市の蔵王開拓で捕らえられたものです。

このほかに、事故に遭い収集されたカラヒワとハシボソカラスの2種の鳥類はく製標本、山形県産の蛾類標本も展示します。



ツキノワグマ

【歴史】故長井政太郎氏収集絵図資料から

昨年3月刊行の収集資料目録『歴史資料Ⅲ』をもって本館所蔵の故長井政太郎氏収集資料3,343点全資料の概要を明らかにできるはこびとなりました。



中野城附近図（延享5年）《新写》

本館所蔵の故長井氏収集資料の特色は昭和10～20年代に書写されたものが多いことで、『歴史資料Ⅲ』のメイン、絵図資料についても同様です。これらは、長井氏の委嘱や指示を受けて書き写されたもので、故原田磐徳氏等のベテランから学生の手になるものまで出来栄はさまざま、物資不足の時代を反映して材質もさまざまです。

本展ではこれらの筆写絵図も展示し、故長井氏の資料収集にかけた情熱に触れるとともに、絵図が描かれた当時の地域の姿と作成・伝来の背景を探ろうとするものです。

【民俗】ワラ製干支人形（石川清治氏・石川たか氏作）

ワラは身近でありながらすぐれた素材として、さまざまな製品に加工され利用されてきました。それを芸術的な域にまで高めた一人が、河北町の石川清治さんでした。妻のたかさんとの共同作業によって生みだされるその作品、特に干支人形は、独創性と技術の緻密さによって全国から高い評価を得ています。

このたびはワラ製干支人形を十二支そろえて展示してみました。ワラの部位の性質に応じた使用法や、束ね・丸め・結



ワラ製干支人形 未

法、動物の特徴をつかんだ表現法などに注目してご覧下さい。

残念ながら石川清治さんは平成9年に亡くなれましたが、現在はたかさんがお一人で伝統を引き継いで製作を続けています。

現代人にとっては不要なものに思えるワラですが、稲作を続ける限りとれる米とほぼ同じ重さのワラが毎年生産されます。素材として、資源としてのワラの活用法についても考えてみたいものです。

【教育】戦時中の音楽資料ほか

今年度寄贈いただいた資料のうち、戦時中のくらしに関わるものを紹介します。

昭和12年に始まった日中戦争は、太平洋戦争へと拡大しました。戦争の激化にともない、国家総動員体制のもと教育や文化などあらゆる面で戦争への協力が求められ、音楽などの芸術分野や子どもたちの遊びにも戦時色が強く反映されるようになりました。当時、「少国民」と呼ばれた子どもたちは「幼い戦力」・「未来の兵隊」として教育され、戦時体制に組み込まれていきました。「大日本青少年団」は戦争遂行のために、銃後を守る青少年の全国的な組織として結成されたものでした。



戦時中の音楽資料

主な展示資料

コンクリーション	1	佐藤豊治氏寄贈
小国町産植物化石	20	伊藤之巳氏寄贈ほか
ナウマンヤマモモ、チュウシンフウ ほか		
山形で近年見つけた帰化植物	24	本館所蔵
コカナダモ、フサジュンサイ ほか		
ほ乳類はく製標本	2	山口和志氏寄贈
ツキノワグマ、アナグマ		
鳥類はく製標本	2	本館所蔵
カワラヒワ、ハシボソカラス		
山形県産スズメガ類標本	240	本館所蔵
故長井政太郎氏収集絵図資料	7	本館所蔵
西山新道細見		
山家村麿絵図 ほか		
ワラ製干支人形		
(石川清治氏・石川たか氏作)	14	本館所蔵
戦時中の音楽資料ほか	16	鈴木正浩氏ほか寄贈
楽譜「大日本青少年団歌」		
「三国同盟強化の歌」ほか		